

『東方』二八二号より

解明されはじめた

中国初期王朝の実態

今井晃樹（奈良文化財研究所）

『夏王朝——王権誕生の考古学』という書名を拝見したときは、いささか驚いた。私には「夏王朝」の实在を「考古学」によって証明する、と読み取れたからである。これまで日本人の歴史学者、考古学者が専門書や学術論文の題目で「夏王朝」の語句を肯定的に使用することはまずなかった。実証性がないからとの理由でむしろその使用を避けてきたのである。しかし本書のプロローグを読み進めていくと、私の第一印象とはすこし違った内容の本であることがわかってくる。

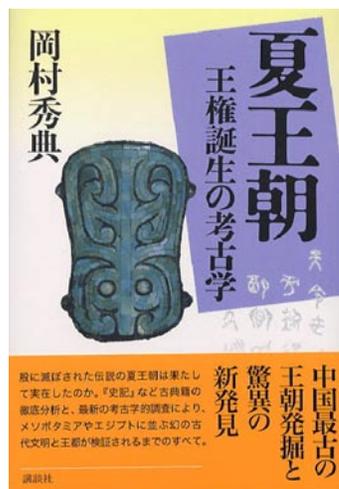
本書の関心は、中国史上最初の王朝がどのように形成され、どのような様相であったのかを明らかにすることにあり、この課題を解決する鍵は、中原地域にひろがる二里头文化にあり、本書の後半はこの文化の考古学的分析にあてられている。

第三章に詳しいが、本場中国における考古学研究は草創期以来、夏王朝の实在証明が最重要課題であった。その目標達成のため、土器の形態分類による細かな編年体系を確立し、二里头文化は夏王朝の遺産であるという認識を得た。そして現在は王朝開始の暦年代の確定と二里头遺跡以外の王都の発見に精力がそがれているという。しかし著者は、つぎなる課題は具体的な時代相の解明にあることを強調する。このことが本書の主要な部分となっている。こ

岡村秀典著

『夏王朝——王権誕生の考古学』

四六判・二五六頁・講談社・一、九九五円



うしてみると『夏王朝——王権誕生の考古学』という書名は、これまでとは違った視点、方法で王朝の実態と形成過程を明らかにするという本書の内容をむしろ如実に表現しているように感じられてくる。

さて、本書の構成を大まかに分類すると二つの内容にまとめられる。前半は夏王朝に関する文献史料の検討、後半は二里头文化を中心とする考古学的分析である。各章の要約は終章において著者自身がおこなっており、もとよりそれに及ぶべくもないが、本書の説明上、評者なりに注目する部分を以下にまとめてみたい。

前半は第一章、第二章にあたるが、夏王朝の開祖禹に関する文献史料と夏王朝の王統譜、王都の記載を中心に検討する。前半部分では関連史料を網羅し、その内容を文献学、歴史学、地理学、考古学などの研究成果を取り入れて、多角的な視野から吟味することに力点がおかれている。とくに近年の出土文字史料との比較から、古典に記載された史料の内容がいつまでさかのぼれるのかを考証し、その説

▼『東方』282号より

一 解明されはじめた中国初期王朝の実態

▲ 今井 晃樹

話、伝承などの成立年代を確認していくところには新味がある。そして禹が登場してくる堯・舜の事績、夏の王都や王統譜の記載は、現在のところ戦国期に成立した史料しかなく、禹についてはすくなくとも西周中期までにさかのぼり得るものがあることを明らかにする。

禹や夏王朝に関する史料の大部分は戦国期に記されたものであり、その内容が果たして史実かどうかを判断するのは非常に難しい。それは古典が成立した戦国期には、列国が自らの王の正当性を証明するために、禹ないし夏王朝の伝承を適宜利用したという背景があるからである。その目で史料を読み解くと、禹の伝承や夏王都の分布がかなり広範囲にひろがっている理由も説明できるといえる。

これまで考古学では発掘した遺跡と文献の記載を結びつけようと努力してきたが、文献研究により復原された夏のひろがりや二里頭文化遺跡の分布範囲とが必ずしも一致していなかった。上述のような文献史料の成立背景を考えると、文献史料と考古学的成果との突き合わせが非常に難しいことを改めて実感する。

第三章以降は考古学的検討である。考古学史、王権の実態、環境・生業・食生活の復原、二里頭文化のひろがりと言及する。

第三章では甲骨文字の発見後、中国において近代考古学が成立し、殷墟遺跡→鄭州商城→二里頭遺跡と発掘され、殷（商）、夏の王都が確認される。そして偃師商城の発見により二里頭遺跡が夏、偃師商城が殷の都であることが確実となり、夏と殷の交代時期と場所とがかなり限定できるようになったことをのべる。

しかしここで著者はこれまでの自身の研究にもとづき、二里頭文化と二里岡文化は土器の器種組成に若干の違いが

▶ トップページにもどる

みられるものの、基本的に連続的な変化をしめしており土器の形態だけから王朝の交代を確定するのは難しいと主張する。さらに放射性炭素（C14）年代測定法の成果を整理し、土器編年とC14年代法のデータには矛盾があることを指摘する。土器の形態的分類や系統的分類だけでは研究に限界があることをしめしており、第四章以降に展開する研究の意義がよく理解できる。

つづく第三章は著者による新しい試みであり、王朝の時代相を明らかにしていく研究方針が貫かれている。

第四章以下では、二里頭文化の遺構・遺物をさまざまな角度から分析する。重要なのは儀礼にかかわる遺構・遺物と、日常生活の痕跡とを区別したうえで分析していることである。このことが章立てにも表れている。

第四章では王権の実態を明らかにする。これまで二里頭遺跡で発見された大型建物遺構は儀礼をおこなう宮殿であり、墓から出土する青銅器や玉器は儀礼において使用された道具であるとする。宮殿、青銅器、玉器は王都である二里頭遺跡にのみ存在し、それらを副葬する墓は規模が大きいことから、その被葬者は儀礼にかかわる支配層であると評価する。青銅器は祖先祭祀に用いる酒器、玉器は所有者の身分をしめす瑞玉と解釈し、これらは古典の記載、青銅器の銘文にみられる礼制につながるものであり、この礼制の成立こそまさに王権の誕生をしめすものであろうと結論する。

これまで二里頭遺跡の宮殿や青銅器・玉器は国家成立の指標として認識されていたに過ぎなかった。この章ではそうした儀礼用具の形態や出土状況を吟味し、古典の礼に関する記載と比較したうえで礼制の成立をのべる。このことによつて二里頭文化は以後、礼制を中心とした支配体制を

固持してきた中国王朝の最初に位置づけることが可能になった。こうした試みははじめてであり、この時代の研究にひとつの方向性を提供したといえる。

つづく第五章は日常生活にかかわる部分である。これまでに正当に評価されてこなかった動植物遺存体に注目する。植物からは当時の自然環境、農業の実態を復原する。動物骨からは、当時飼育されていた家畜の種類やその調理法にも言及する。土器からは、主食の調理法や食卓の食器のありかたを復原する。

ここで注目すべきことは、単にそれぞれの状況を復原するだけではなく、二里头文化に前後する龍山文化から二里头文化への変化をとらえその意味を解釈していることである。たとえば二里头文化と二里头文化では食器の組み合わせや煮炊き具の形に違いがある。これは食習慣の違いを反映している。一方、土器における酒器は二里头文化から二里头文化にそのまま引き継がれている。これは食習慣のこととなる集団が儀礼の方法だけを採用した結果である。王朝の交代を議論するならば、形態の変化や組み合わせの違いの意味を検討する必要があることを十二分にしている。

第六章では二里头文化と周辺地域との交流の様相を描き出す。ここでも日常生活の土器と儀礼にかかわる酒器・玉器などを分けて分析する。二里头遺跡での出土例と酷似する酒器や玉器が遼寧省や四川省、香港あたりまで分布することについて、従来は二里头文化の影響力の強さ、人の移住といった評価がなされてきた。しかし実態は二里头遺跡で成立した儀礼セットの一部が出土しているに過ぎないため、その現象は二里头文化をになう人の移住ではなく、在地の支配層が儀礼の一部を選択的に受容した結果であると結論する。文化の拡散は、遺物の類似のみによって議論

▶ トップページにもどる

すべきでなく、その用途、使用される背景を考慮したうえで評価しなければならぬことがわかる。

最後に全体的な感想を記しておきたい。これまで先秦時代の考古学では常に文献記載と考古学的事実との関係が問題になってきた。とくに夏王朝に関しては史料がすくなく不明な点が多いため、王都の場所や王統譜など地域や時代が特定できる史料が選択的に利用されてきた感がある。本書では現在利用できる史料の全体像と性質を明らかにしたという意味で大きな成果をもたらしたといえる。今後夏王朝の史料を利用する場合に参照すべき研究であろう。

本書のあとがきにあるように、著者は物の形態や変化の背景にある人の営みを明らかにしようとしてきた。後半の考古学的分析ではこのような姿勢で夏王朝の実態を解明する。

従来中国考古学では土器の形態的・分類による編年と系譜論が中心で、物の形態や器種組成がなぜ変化するのか、どのような変化が王朝の誕生、交代をしめすのかを追究することは少なかつた。そして考古学的文化の区分から政治支配の問題までを土器によって説明しようとする傾向が強い。

本書ではこのような研究に異議を唱え、まず日常生活用具としての土器と、儀礼や支配層身分にかかわる遺物とを明確に区別する。前者から日常生活の様相を復原し、後者から王権の実態を究明する。支配や王権を語るにふさわしい資料を選択し、分布や出土状況を吟味したうえで現象を解釈する。最後に日常生活から政治までを総合して歴史的評価を下していく。こうした手続きは非常に重要であるにもかかわらずこれまでの研究では軽視されてきた。この意味で本書は中国考古学にとって画期的な業績といえる。

- ▼『東方』282号より
四 解明されはじめた中国初期王朝の実態
▲ 今井 晃樹

この本は著者がこれまでおこなってきた多くの研究を基礎として成り立っている。そしていままでの研究を再録した論集ではなく、中国王権の実態を明らかにするという目的で改めて書かれた研究書であるといえる。ここに既発表の論文を表示することはさけるが、より理解を深めるならば、それらを読む必要がある。

本の装丁や文章表現は親しみやすくお値段も手頃であるが、内容はそれに似合わず非常に豊富である。ぜひ、熟読をお勧めする一書である。

◀ 今月の『東方』

◀ 書評目次へ

▶ トップページにもどる